

平成30年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
 (次期学習指導要領に向けた実践研究)
 成果報告書 (概要)

受託団体名
筑波大学

1 指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
国立大学法人 筑波大学	特支	聴覚	筑波大学附属聴覚特別支援学校

2. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
平成 30 年 7 月	教員のワーキングチーム希望調査	—
平成 30 年 8 月	機器の設置工事	—
平成 30 年 9 月	音を振動に変換する装置を使用した体育科の授業実践	生徒へのアンケート調査
平成 30 年 9 月	英語でのコミュニケーションを通じた英語科の授業実践開始	生徒へのアンケート調査
平成 30 年 9 月	音を振動に変換する装置と ALT を活用した英語科の授業実践開始	生徒へのアンケート調査
平成 30 年 11 月	平成 30 年度 第 45 回 聴覚障害教育担当教員講習会での授業公開 (中間報告)	参加者の評価 (反応)
平成 31 年 1 月	筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要第 41 巻での報告	—
平成 31 年 1 月	外部専門家による英語でのコミュニケーションを通じた英語科の授業実践の参観, 評価及び助言	外部専門家の口頭での評価と助言
平成 31 年 1 月	ICT 機器の活用と次年度の計画に関する意見交換会	—
平成 31 年 3 月	高等部普通科部会での一年次報告	—

(2) 研究課題

生徒の主体的・対話的で深い学びを実現するために、視覚を主に活用するためのICT機器, あるいは音を振動に変換する装置 (以下, 補助装置) を用いて, 効果的な指導内容・方法について研究する。

(3) 研究の概要

聴覚障害児教育における主体的・対話的で深い学びの実践に向け、生徒一人一人の障害の状態及び聴覚活用の状況に応じた3つの実践研究に取り組んだ。

- (1) タブレット端末のコミュニケーションアプリを用いた視覚でのやりとりを行い、生徒の聴覚活用の状況に関わらず、英語で対話や議論を行うことを可能にする授業を展開した。生徒と教員が全て英語で発話し、そのやりとりの内容と教材提示の両方を、複数台のプロジェクターを用いて表示した。その際、プロジェクターを壁面に固定し、教員がPCやタブレット端末などの機器を壁面から引き出されたケーブルに接続するだけで容易に授業を展開できるようにした。
- (2) 補助装置を用いて、学習の際に用いる感覚に触覚を新たに加え、英語のネイティブ話者であるALT(Assistant Language Teacher)の発音を聞かせた。このことにより、英語の強勢(ストレス)を意識させたり、英単語のイントネーションの改善を試みたり、英語のスラッシュリーディングを体得させたりし、より体感的な授業を実践した。
- (3) 体育祭で実施しているマスケーム(ダンス)では音楽に合わせて身体を動かすことが求められ、音楽の拍に合わせる必要がある。そこで、補助装置を用いて、生徒が拍とりを円滑に進められるような環境を与えながら授業を展開した。使用した補助装置は光も発生するため、前方台上のモデルとなる教員が見えない生徒でも、周囲の生徒の補助装置の光を見てテンポ及びリズムを随時把握することもできた。

(4) 研究の成果

- (1) 9月からの2学期間、英語での視覚を用いた対話を継続的に行った。事後のアンケート結果から、タブレット端末を使って英語で会話をするのが好きまたはやや好きという生徒、及び質疑応答や議論をするのが好きまたはやや好きという生徒がどちらも80%以上であることが明らかになった。加えて、コミュニケーション英語Iの教科書の内容について、教科書に書かれた内容、関連事実、意見に関する教員からの英語での発問に対し、質疑応答や議論が成立するようになった。
- (2) 生徒に補助装置を付けさせ、教員及びALTが発音する英語の強勢(ストレス)を体感させた。事後のアンケートでは、補助装置を使用する以前よりも英語のストレスを意識するまたはより強く意識するようになった生徒は30%程度だった。一方で、補助装置の動作が安定しないため強弱がわかりづらいと書く生徒や、教員及びALTの発話と振動の間に時差が生じることに違和感を覚える生徒等もいた。
ALTが授業を進行することでより積極的に英語学習に取り組みたくなった生徒は90%以上だった。

(3) 体育祭のマスゲーム練習開始時には、全生徒に補助装置を付けさせ、その後、継続して使用するかどうかは生徒の希望とした。その結果、最終練習まで使用した生徒は4名（3%）であった。体育祭終了後、全生徒に対するアンケート結果から、曲のテンポをつかむまでには有効な手段だと考えられるが、何度か練習すれば曲のテンポを掴むことができ、継続して使用する必要性を感じる生徒が少ないことが分かった。

(5) 課題と今後の方策

第一年次である今年度は、音を振動に変換する装置を、英語及び体育の実践研究で用いた。英語の実践研究の事後アンケートでは、補助装置の使用が英語の強勢（ストレス）に対する生徒の意識の変化につながったとは断言できない結果だった。ALTの活用は、生徒の英語学習に対する意欲の向上に役立つと言えた。

また、体育の実践研究では曲のテンポをつかむまでには補助装置の使用は有効な手段だと考えられたものの、最終練習まで使用し続けた生徒は3%にとどまった。

視覚を主に活用するためのICT機器を用いた実践研究では、生徒の意欲の向上とともに英語での質疑応答及び議論の成立が認められた。

したがって、第二年次は、第一年次で特に成果が大きかった英語に焦点を当てて研究を行い、その成果をその他の教科等でも活用していく。

第一年次は教室前方の黒板の右半分もしくは左半分あるいは両方に投影できるようにプロジェクターを固定したが、活動の種類によっては黒板の中央に投影することが望ましいことがあることがわかった。したがって、第二年次は教室内に可動式の超短焦点プロジェクターも設置し、状況に応じて黒板のどの位置にも投影できるようにする。

また、第一年次は1学年の1グループを対象に対話や議論による英文の読解を行ったが、第二年次は対象学年を1,2学年とする。